コラム

中嶋哲夫の「人事も歩けば」

② なにわ淀川花火大会

おつきあいをいただいている企業さんの屋上で、淀川花火を見ました。70万人ともいわれる観客が集まる人気の花火大会です。混雑しない屋上からの花火見物は心地よく、心から楽しめました。

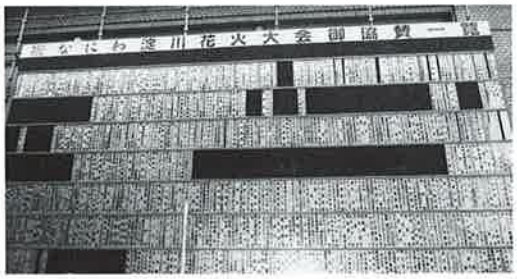
淀川花火の正式名称は、なにわ淀川花火大会。始まったのは平成元年。十三という庶民の町の住民が、手づくりで開催しました。当時は、淀川花火大会。それが夏の風物詩として定着し、規模も大きくなって、なにわ淀川花火大会と改名しました。行政や観光協会が関与しない、住民主催の花火大会としては全国一の規模といわれます。

聞くところによれば、花火大会を開催した中心メンバーは、中学校のPTAの集まり。なんでも、窓ガラスが1枚もないほど荒れていた中学。子どもをその中学に進学させないために転居する人が多かったといわれた中学。それを立て直そうとされた方々です。その方々が、コミュニティー誌を育て、祭りなどの地域活性化に取り組んでこられたのです。花火大会はその活動の延長線上にあります。そんな花火大会なので、資金は市民や企業からの寄付や売り出される座席のチケット売上げです。

十三の町のシンボルである阪急十三駅西口に、毎年の寄付金リストが張り出されます。寄付の最高額は某建設会社。十三から育った会社です。毎年500万円の寄付をされます。匿名で150万円の寄付をされた方もおられます。大手銀行の名前の横にストリップ劇場の名前があったり、スナックの名前がたくさんみられます。掲載の順序は寄付金額の多寡だけですから、ラブホテルも八百屋さんもクリニックも入り交じって掲載されています。庶民町の多様性そのものです。たばこを吸いながらそれを眺める時、筆者はほっとします。

人の活力を引き出すものは、多様性が許容されることと、1つの物語を共有すること。中学を立て直した物語を共有した人々が花火大会を生み出し、その場で多様な人々と新たな物語を共有する。それが地域の活力となる。物語の共有を強いられる大災害の後、人々の多様な動きが活力になることを信じたいものです。

（MBO実践支援センター代表）



次号予告

2011年10月5日号　*No.2616*

【クローズアップ解説】
広がるか　確定拠出年金のマッチング拠出　■山崎　俊輔

【実務解説】
国際比較の考え方とその方法　■古田　裕繁
——国際統計に強い担当者になるために

◆アジア各国の労働条件の現状——厚生労働省「2009～2010年　海外情勢報告」から
◆中途採用者の初任賃金（2010年10月～2011年3月分）　■厚生労働省
◆福利厚生シリーズ④　慶弔休暇制度　■産労総合研究所
〈シリーズ〉わたしの「人事賃金管理」論⑨　■林　明文
今後の掲載予定▶　産労総合研究所調査「資格等級制度の実態」

編集部へのご質問
お問い合わせ
TEL: 03-3237-1611
FAX: 0120-703-641（フリーダイヤル）
メールアドレス:
edt-a2@sanro.co.jp